『ことばあつめ』と、『カルタ作り』 そして『文字』への取り組み	(1) アプローチカリキュラムの実践
認定こども園	認定こども園　高洲幼稚園
＜実施時期＞	2020 年 6 月～3 月

＜幼児期の終わりまでに育って欲しい姿に繋がる部分＞

ことばによる伝え合い、協同性、豊かな感性と表現、思考力の芽生え、数量・図形、文字等への関心・感覚

＜活動のきっかけ＞

文字の書ける子とまだ関心のない子では個人差が大きく、自信過剰な子や逆に自信のない子ができてしまうことが気がかりだった。また、１年生の初めに、連絡帳が書けないなど、学校生活のスタートでつまずきが見られることを耳にし、保育者として心を痛めた。

＜活動のねらい＞

子どもの発達に沿って無理せずに文字に関心を持たせるため、“ことばあつめ”を活動のねらいとし、①～③の活動を通して言語を中心とした経験を身につくように働きかけた。①文字そのものでなく“絵による表現”の導入、②小グループでの話し合いをとおして、一人ひとりが自ら選んで“絵”を描く。③クラスみんなで作ったカルタで実際に遊んで楽しんだり、一人ひとりの個性を生かした劇をクラス全員で作り上げる。

＜経験する内容＞

・『ことばあつめ』の経験を積み上げ、たくさんの語彙を獲得する
・小グループで話し合う中で、解決する経験をする
・自分で感じたり、考えたり、意見を発表したりするばかりでなく、他の人の気持ちに気づく
・一人ひとりが責任を果たしつつ、みんなで完成させて行く喜びと自信を共有する

＜新型コロナウイルス感染症に対する活動の工夫＞

通常の室内保育時の感染対策
・室内対角線窓開放による換気と、話し合いが三密にならないように、日常的に配慮する
・クラスで文字や絵を描くときには、同じ向きに、１テーブルに２人が座り、マスク着用とする
・手指やテーブル、イス、ドアノブ、玩具類、ホワイトボードなどの消毒

＜活動の内容＞

『ことばあつめ』は、日常的に遊ぶ“しりとり遊び”などのことば遊びを経て、50 音順に語彙を思いつく限り集めることから始める。

小グループごとに話し合い、50 音の１文字を選んで、グループの各メンバーがそこに出てきた単語を絵に表し、50 音全部を絵で 表現する。

『カルタ作り』は、“手作り大型絵本カルタ”でカルタとりを楽しむ。

カルタの読み札とその絵札を作成する。読み札は、50 音 順に全員が考えて発表する。

その中から多数決でクラスの読み札を決定する。読み札は、なぞりがきで製作する。

『じぶんのなまえをかく』は、担任自筆のお手本のなぞり書きからはじめ、書き順、はね、はらい、鏡文字などに注意しつつ、担任手作りの用紙で練習し、習得する。

＜活動でみられた子どもの姿＞	＜環境構成・教材や保育者の援助等＞
(1)『ことばあつめ』での気づき ①『せんせい　かが（が）いた』(---か（蚊）は、しばしば、【kaga】と記憶されている。 （【chiga】(血が）も、同じ） ②『おだんご と だんご は　おんなじ？』という疑問が子どもから　よく出てきた。また、“おりがみ”、“おんどり”など、その言葉の成り立ち上、不可欠な“お”のつくことばも、たくさん探すことができた。 ③『ちいさい いぬは、こいぬ　　こどものいぬ』 ー→　こねこ、こうし、こぶた、こやぎ---こライオン？　こくわがた？ ④「せんせい！“あめ”って、たべる“あめ”？ふる“あめ”？」　「どっちもあるし・・」 “橋　端”と、きて、「せんせい、“はし”（箸）もある？」と叫んだ子がいた。橋と端と箸の抑揚の違いに多くの子が気づいて、興味を示し、抑揚を試したりしていた。他に、“たこ”（蛸と凧）、“め”　（目と芽）、“さけ”（酒と鮭）、“はな”（花と鼻）“くも（雲と蜘蛛）など ⑤間違って記憶している言葉の修正：トウコロモシ→　トウモロコシ　エベレーター—　→エレベーター　オカサナ→オサカナ マクス→マスク しむ→しぬ（死ぬ） etc ⑥幼児語のまま使っていることばの修正【syacha サ行　タ行等の混乱　etc】 ⑦物の名前、人の名前、動きを表す言葉、様子を表す言葉などに気づく（ことばの機能） （2）ことばを絵にする話し合い活動：リーダーを中心に、小グループで話し合い、分担して、ことばを絵に表す——→はじめは、文字を書くことでの個人差を子どもに感じさせたくないので、絵で表す方法をとったが、絵を描くことによって子ども同士に共通のイメージが共有され、むしろ、一つひとつの言葉の概念化が進んだととらえることができた。 　また、話し合うことで、自分たちで問題解決する方法に少しずつトライしてきている。 	《ねらい》 (1)話し言葉のスキルの向上---語彙の確認・語彙を増やす・ことばの働きに気づく→豊かな表現 ①-一語一音のことばがあることに気づく （は（葉・歯【ｈａ】、い（胃）、き（木）etc） ②“お”のつく言葉をみんなでたくさん探してみる。そこから、子どもたちは、“お”がついても、もとのことばと意味は変わらないと気づいた。（接頭語の働きに気づけるようにするにとどめる。） ③“こいぬ”の“こ”を、他の動物の子どもに適用してみる。あまり言いなれないことばも出てきたが、語頭に「こ」をつけてみて小さい動物を表すことにトライすることが出来た。 ④同音異義のことばを探すが、でてこなかった。一休さんのとんち話の『このはしわたるべからず』の話をした。昔話だが、興味をもってもらえてよかった。その後、同音異義語がいくつか挙がった。 ⑤⑥まちがえて記憶していることばや幼児語は、時々出現するので、その度に修正して、他の子たちとも共有しておくようにする。 ⑦ことばの働きのカテゴライズは、気づいている子もいるので、品詞を教えてしまうのでなく、どんな働きのことばか子どもたちに考えてもらうようにする。 (2)話し合い活動での成果：リーダーを中心に、“ことばあつめ”で集めたことばを絵で表すための、小グループでの話し合いを各行ごとに行う。→ほかの子の意見を聞いたり、自分の意見を言ったり、みんなで決定したり、意見調整して、話し合いで解決する力を養う。 　また、ことばを絵で表現することで、友だちと共有できる絵が短時間で描けるようになった。これは、絵のスキルだけの問題ではなく、とりもなおさず、対象の特徴を概念化する作業を短時間でできるとともにイメージの共有化の段階に達したと考えている。 　出来上がった作品をグループごとに発表したり、掲示することによって、長い期間、文字に親しむことができる。

(3) クラス一つの『カルタ作り』： ・子どもが自分で考えだした文章は、実感がある。 子どものオリジナル版の典型的読み札の一例としては、「ゆたかくんは、かけっこがはやい」が、ある。（確かにゆたかくんは、学年で１番の俊足だった。）この読み札は勿論、多数決でトップ当選した。 ・難航しているお友だちには、他の子がヒントを出したりして、サポートしてくれて文章が完成することもある。 ・１文字について全員の読み札の文章が書きだされ、挙手でクラスの読み札が一つに絞り込まれる。その読み札について、小グループでの話し合いで、だれが、どの絵札の絵を描くか決め、クラスのカルタを全員で作り上げる。	(3)クラス１つのカルタを、みんなで作る ・１人１人が読み札を考えるために、「～が（は）～した（である）」という主語－述語の基本文型を、これまでのカルタを例に確認する。そこからスタートして、どう修飾すれば様子がよくわかるのか、についても気づけるようにする。 ・どの子も必ず、一枚は自分の読み札が採用されるように配慮する。読み札は、なぞり書きで丁寧に書き、絵札も読み札とセットで掲示され、クラスで一つのカルタができあがるのを楽しみに待つ。 ・カルタとりをする際は、どの子も１枚は取れるように配慮し、カルタとりの楽しさを 共有する。

＜成果と今後の課題＞

① 当園の言語のカリキュラムは、現在のところ、毎年の実践を踏まえて、子どもの状態やニーズによって、多少のマイナーチェンジはしてきているが、当初から、大きな変化はない。むしろ、“ことばあつめ”の絵を媒体にする段階が入ることで、当初の意図以上に、概念化が進み、書き言葉習得にじっくり取り組めたと考えている。

② 取り組みの過程で、もう一つのベースは、”話し合い活動“であり、これは、年長組では、リーダー（1 年間でどの子もリーダーを経験する）を中心に、全員の意見を聞いて決定したり、課題解決を目指す取り組みである。話し合うことによって、やらされるのではなく、自分たちで取り組むモチベーションがアップする或いは、継続するということも、文字への関心が高まる要因になっていると考えている。

③ ここでは取り上げなかったが、“遊びの中で経験させる英語”については、他言語を学ぶというよりは、多文化経験としてとらえ、外国語に対する拒否反応をできれば避けられるようにして、耐性を作っておきたいと考えている。世界を視野に入れざるを得ない世代だからこそ、日本語で考えられるようになった思考の段階で、いろいろな外国語も感覚的に受け入れられるようにしておくことが重要と考えている。

④ 今後の課題・難問は、IT をどう取り入れるのが子どもの成長・発達とマッチするのかを考えることである。IT は、幼児の発達にどうかかわれるか？　じっくり発達する部分とのバランスの問題かとも思うが、急速な変化による精神的な歪みが懸念される。

＜カリキュラムコーディネーターのコメント＞

文字への興味関心が高まる時期を逃さずに、しりとり遊びなどの日常の言葉遊びの経験を土台にして、「ことばあつめ」「グループでの話し合い」「カルタ作り」と、異なる活動を関連づけながら段階的、計画的に活動を進めており、子どもの心情・意欲・態度を大切にし、楽しみながら活動できるようにした工夫や配慮が随所に見られます。その過程で言葉の感覚を豊かにすること、イメージを絵などで表現すること、子ども同士の伝え合いの経験も重視されており、総合的な指導が実践されていました。子ども達が作ったカルタ等の写真からも、子どもがいきいきと活動したことが伝わってきます。